第７５回佐賀県展　審査員評

第１部　日本画

今回の日本画搬入点数は 23 点と昨年の 28 点から 5 点少なかったようです。しかしながら搬入された作品の内容は、目に見える現象を追いかけるばかりではなく、其々が対象と真摯に向き合い、個々の想いを墨や絵の具に置き換える作業を粘り強く追い求める姿勢が見とれる出品作が多く見られました。皆さんの作品は、芸術の分野でも AI が席巻しようかと言う時代にあって、思考と手仕事をダイレクトに繋ぐ可能性を拡げる仕事であり、今後も存在意義のある美術表現として重要な地位を占めると感じています。次年度も益々創作意欲を掻き立てて頂き素晴らしい作品が集うことを期待いたします。

佐賀県知事賞を受賞された井添將仁さんの「風の記」は楽器を奏でる二人の人物を正方形の画面に配し、無地の楽譜を効果的に使うことで聞こえないはずの音が静かに宙を舞う情景として表現されています。色数を抑えた作品ではあるが、その事が返って落ち着いた音色を感じさせます。佐賀県議会議長賞受賞の荒木正次さん「静寂」は、山腹の神社に向かう参道を描いた作品である。仕上がりに派手さはないが、少し近づいてみるとその表現に眼を奪われる。ぼかしたようなグラデーションではなく、細かい色面分割を駆使しながら其々が主張すること無く一つの空気感を漂わせている。地味な表現になりがちなモチーフだが、精気ある色味を使い飽きさせない画面を創り出している。第 75 回記念特別賞受賞の石﨑吉枝さん「その一瞬」は大きな葉に白い花を付けるウコンと、水鉄砲を持つ子供が濃密な世界を作り出している。作者の意図には優しさや、平和を願う気持ちが込められているようだが、様々な表現方法を駆使した画面からは異国の匂いと、生き生きとした生命の営みを感じさせる。佐賀銀行文化財団賞受賞の谷川美姫さん作品「もう、これっきり。」は日本画の画材に触れた最初の作品だそうである。小さな作品だが、それを感じさせないスケール感があり、ドキリとさせる若々しい痛みがある。また、絵の具の特徴を活かした表現にも関心を寄せておりその成果には眼を見張るものがある。佐賀新聞社賞の磯野真希さん「夢境」の魅力は色彩にあると思う。暗い紫色で纏められ、女性の夢の中の時間が静けさを持って表現されている。頭部に使われている色味も単なる肌色ではなく暗い紫色の中で自然に溶け込んでいる。欲を言えば、身体の構造を作り出す衣服のラインには注意が必要である。NHK 佐賀放送局長賞の原田正則さん「(廃坑)→春は必ず来る」は必ずしも上手い部類の絵ではない。しかし、それだからこそ絵の中に描かれた人物の想いが伝わってくる。この絵の良さは技術的説明が難しく、その人への想いと体験がなせる技と言うしかない。見飽きることがないスケール感のある作品である。

（今村雅弘）

第二部　洋画

今年度の応募作品の総数は１２２点で、想像以上に色々なテーマの絵が集まり、賑やかな活気のある雰囲気を作品群から感じ取り、それぞれのテーマから日々移り行く風景、人の表情など、その奥から見えてくる新しい発想の数々の作品に出合うことができました。

佐賀県知事賞の森永雄二さんの多布施川河畔風景をモチーフにした絵。作者の身近な場所を改めてじっくり見ることで樹木や川の水面など画面の隅々まで描き切っている。硬質の画面だが、ある一時のさわやかな時を感じさせてくれるのが秀逸と思う。

佐賀県美術協会賞の青木奏海さんの画面いっぱいに描いた顔の絵。題名から想像すると親友の顔だろうか。暖かい黄色の髪の毛、寒色を使って描いた顔。その色彩の表現の対比が魅力的に感じ、その静謐感に引かれる。

読売新聞西部本社賞の高場正義さんの高原を俯瞰した絵。不思議な白いかたちの雲が４つ。題名に書いてあるように高原に雲が走っている。ドローンの映像に慣れ親しんでいるのか、高原を疾走する雲をイメージできる。そして勢いよく走る雲が画面を動かす。

佐賀銀行文化財団賞の江川和則さんの棚じぶと海中鳥居の絵。太良町にある有名な景色。有明の海の水が引いた景色が軽やかで、良い。そして、モノトーンの色彩の中に赤い色。自然の不思議さを感じさせてくれる作品だ。

ここ数年急激に自然が変化しはじめ、そのうえコロナ感染で不安だった日々。そして最近の記録的な異常気温で各地の猛暑、豪雨。環境が何か変わりつつあるのだろう。きっと今回出品された作者の思考の中に、そういった問題意識を持って新しいものを創り出そうとしたに違いないと考える。あらためて見えるものの背後にある物事を観察する視点を大切にすることで、今後の創作に大いに期待します。

（上葛　明広）

第３部　彫刻

彫刻の出品数が減少していると聞きましたが、今回出品された作品はいずれもすばらしく、大変悩みながらの審査となりました。小さくても細部まで根気よく形を追求し完成度が高い作品や、多種多様な素材を独創的に取り入れて造形した作品、作品を取り囲む空間にまで意識を向けて制作された作品など、惜しくも入選・入賞を逃された作品であっても、作者様のこだわりや思いが伝わってくる見ごたえのある作品ばかりでしたので、１つ１つ時間をかけて見させていただきました。

佐賀県知事賞の「紡ぐ」（森正彦さん）は、この県展に向けて並々ならぬ熱い思いを込めて制作されたことが作品の規模と高い完成度から伺えました。多様な鉄素材を組み合わせて形を成す表現が面白く、作者の確かな技量が遺憾なく発揮されています。

佐賀県議会議長賞の「炎の舞」（草場龍介さん）は、炎の揺らめきを一筆でなぞるような、また、なぞる際の勢いや溜めに伴う呼吸をも感じられるような作品です。一見、紙に見せない巧みな技量が伺えます。便宜上、美術館の白い箱台に展示しましたが、作品がより魅力的に見える高さ・色・素材・大きさの台をご自身で準備されてもよいのではないかと思いながら見ていました。

第７５回記念特別賞の「星を纏う」（河辺琴弓さん）は、人物を『V』のフォルムで表現した大胆な動勢が目を引き、人体の伸び・縮み・緊張・緩和などのバランスにも魅力を感じました。一方で、地山は作品を魅せる上での大切な要素という意識を持って、もっと研究を重ねて欲しいと思います。

佐賀銀行文化財団賞の「はねる」（楢﨑由依子さん）は、心地よい風と蝶をまといながら、無垢な幼い動物が駆けていく様を形にした愛らしい作品です。淡く柔らかい色も美しいと感じました。作品を支える支柱の素材や数、角度、固定の仕方など、台を含めた全体の見せ方を検討されることで、さらに作品の魅力が伝わるものになると思います。

佐賀新聞社賞の「源」（古川大淳さん）は、地元の豊かな水を主題に制作された作品です。段階的に色分けされた樹脂層が右に向かって徐々に透明になるのは、山から河川への水の移ろいのようにも感じました。イラストでよく表現される水の形ではなく、取材先で感じたイメージから創造的に、ご自身の形を追求されたものが見てみたいと思いました。

以上、入賞５点のみの審査評ではありますが、可能なら入選に至らなかった作品を含めて全ての作品について、それぞれの魅力的な部分を作者様にお伝えしたいところです。それくらい素晴らしい作品が集まった第７５回佐賀県展であると思います。

彫刻は現実世界にある素材を手や道具を使って立体的に表現する、体力も気力も必要な分野であると思います。時に泥だらけ埃だらけになりながら、天候に左右されたり、制作によっては満身創痍になることもありますが、創り出す喜びはかけがえのないものです。つくる楽しさや喜びを１番に、これからも夢中になって制作を続けていただけたら嬉しく思います。

（白石　恵里）

第４部　工芸

佐賀県知事賞を受賞したガラス工芸作品《響き合う》は、数百本におよぶガラス板を一枚一枚精緻に加工し、緻密な計算と高度な技術によって一体の造形へと昇華させた秀作です。ガラスは熱や圧力に極めて敏感で、切断・研磨・接合のいずれも高度な精度が要求されますが、本作はその困難を克服し、透明素材ならではの強度と繊細さを見事に両立させています。積層された板が織りなす煌めきは、光を受けるたびに複雑な反射と透過を生み出し、空間そのものを変容させる力を備えています。また、透き通る影の表現は、単なる装飾性を超えて時間や記憶の深まりを想起させ、鑑賞者に深い余韻を残します。とりわけ注目すべきは、ガラスを単なる素材として扱うのではなく、その特性を構造的・美学的に研究し、新たな造形言語へと昇華させている点です。これは従来の工芸における「器」や「装飾」という枠を超え、ガラスという素材自体を主題化する革新的な試みといえます。工芸史的に見ても、素材研究と造形美をここまで統合した事例は稀であり、現代工芸の流れに新たな地平を切り拓くものとして高く評価されます。

佐賀県教育委員会賞を受賞した《練上組鉢 Digital Camouflage》は、磁器による高度な練り込み技法を駆使し、緻密な構想と確かな技術力によって完成された秀作です。練り込みは、異なる土を幾層にも重ねて文様を生み出す極めて高度な技法であり、成形から焼成まで一貫して精密な管理を要します。本作はその難しさを克服し、緻密かつ鮮やかなパターンを器の全体に展開させています。特筆すべきは、デジタル的で機械的な模様をあえて練り込みという伝統技法で表現した点にあります。手仕事のわずかなゆらぎが加わることで、規則性の中に有機的な生命感が宿り、デジタルとアナログの境界を巧みに揺さぶっています。また、高台の裏に至るまで細やかな配慮が行き届き、作り手の徹底した美意識と緊張感が伝わってきます。素材と技法の研究に独自の解釈を重ね、造形的にも実験的な広がりを見せる本作は、練り込み技法の可能性を再定義する試みとして高く評価されます。工芸史的に見ても、伝統的な磁器技法を現代的な感覚と結びつけ、新たな表現領域を切り拓いた点において、次代の磁器工芸を展望させる意義深い作品といえるでしょう。

第 75 回という記念すべき節目の年に、審査の場に立ち会わせていただけたことを、大変光栄に存じます。本展は、戦後わずか６年という混乱の只中にあって、文化の灯を絶やさぬとの強い誓いのもとに 1951 年に立ち上げられました。その志を受け継ぎ、今日まで展覧会を守り育んでこられた佐賀県の関係者の方々、そして地域に根ざして文化を支え続けてきた県民の皆様の長年のご尽力に、心より敬意を表します。受賞作品はいずれも伝統と革新を高い次元で結び合わせ、工芸の未来

を照らすものでありました。本展の積み重ねが、これからも佐賀の文化をさらに豊かにし、次の世代へと受け継がれていくことを願い、講評といたします。

（小泉優莉菜、井戸川　豊、若山裕昭）

第５部　書

伝統ある佐賀県美術展覧会の書の部門を担うことになり、審査に亘りどの様な技法で、どの様な表現をしてくるのだろうか。伝統美の追求か。今に生きる現代性の表現かと胸を躍らせて一点一点作品を拝見しました。

作品から受ける息づき、呼吸を感じ、又、リズムから生まれる線条に目を見張ることが多く大変レベルの高さも感じました。

素材の選び方、そしてその文字を紙面の上にどう立体的に表現するかの心の内をも垣間見ることが出来、あらためて文字のもっている強さを再確認した審査でした。

今年の書部門は 117 点の出品があり、その内漢字 26 点・かな 14 点・調和体６ 点・小字数８ 点・墨象５ 点・篆刻４ 点の合計 63 点が入選となりました。

そしてその中より特別賞 12 点が選ばれ、佐賀県知事賞には小字数部「吉次雪子」さんの淡墨作品「威」が選出されました。淡墨を駆使し、むっくりとしたいい面構えで正面をにらむ程で、どっしりとし、少々の事では動じない程の肝っ玉の座った頼もしい作で筆の動きと吐ききった呼吸がうかがいしれる見事な一点となりました。

佐賀県議会議長賞には「正寶直美」さんの漢字作。とても気宇の大きな動きと開放感で大宇宙を舞っている様でもあり、懐の広さと軽妙多彩な表情で楽しい作。自の心の中を自由になんとも心地良い作で大きさを感じました。

第 75 回記念特別賞には、かなの「山口越周」さん作。ブルーの加工紙に爽やかな秋を感じさせる構成。盛り上がりを大きく展開する中盤に置き、落ち着いた墨色と練度の高い技量とが相俟った佳作。

佐賀県書作家協会賞は「志岐陽華」さんの調和作品、偶然性ではなく、確因たる裏づけのある技法で、多くを語らず、黙々と自分のリズムで強靭でしかも特折みせる細線ながら凛とした線条が緊張威を生み、透明な作となりました。

育った環境、考え方も各々異なりますので自らの美意識を磨き、今に生きる書を書くことが大切

だと思います。

伝統を礎にし、それを芯にし、心の内を表現することが使命だと強く感じました。

（室井玄聳、松井玉箏）

第６部　写真

第 75 回佐賀県美術展開催おめでとうございます。長きにわたってつづけてこられたのも恵まれた自然と佐賀県民の美術文化度の高さが要因していると思います。

さて、昨今地球温暖化による異常気象によって広範囲のエリアが災害に見舞われています。佐賀県内でも度重なる水害や天変地位による被害を受けられた方もおられると思います。改めてお見舞い申し上げます。環境の急激な変化によって消え去っていくのも多い中、地球を愛おしく思い、美しい自然を護らなくては人類そのものも存在しえなくなるのではという危機感を感じています。豊かな自然の中でこそ英知が育まれていくと信じています。応募作品に地球自然環境の改善を啓発するような作品がでてくるといいですね！今回の応募作品の内容としては普遍的な題材のものから写真ならではの多様な表現によるバリエーションに富んだ作品が多く深く拝見させていただきました。選考に於いて重視したのは、被写体のもつインパクト性、タイトルを含むメッセージ性、そして写真プリント仕上げのクオリティの高さがトータルして整っていて共感を呼ぶものとしています。上位入賞作品はこれらの基準を満たした力作揃いでした。上位四位賞全て、人物が被写体として介在している作品となったのも印象的でした。県知事賞となられた「祭りの顔」佐々木弘紀さんの作品はトータルした構成力もお見事でした。そして何より被写体の元気を共感できるという撮影者の狙いが明快で今回の大賞にふさわしい内容でした。第 75 回記念特別賞「あたいの夏だっ！」廣木昭則さんの作品は今年の異常熱波の時世をウイットセンスを込めて撮られた力作でした。県写真協会賞「廻る山車」柴田洋さんはスローシンクロを生かした表現から撮影者の作品づくりへの真摯な姿勢が窺えました。作品づくりに必要なことはいい被写体と出会う為の感性を養うことが大事です。その感性を活かす表現力を磨き、写真の原点ともいえる記録性と描写力を生かした作風づくりに今後もチャレンジされることを期待しています。

（林　義勝）

第７部　デザイン

本展に寄せられた作品は、環境問題や動物愛護、ジェンダーといった社会的課題から、伝統文化の再解釈や地域産業の魅力発信まで、実に幅広いテーマに及んでいました。なかには、現代人が抱える個人的な心情を丁寧にすくい上げ、それを通して多様性や相互理解への配慮を促すような作品も見受けられました。また、多くの出品作において、ビジュアルと文字を組み合わせる際に、テーマと響き合う独自の文字表現が工夫されており、審査を大いに楽しませていただきました。

佐賀県知事賞の『大好評上映中！！』は、劇場のスクリーンに映し出された「The End」の文字が印象的でした。観客席に座るのは絶滅危惧種の動物たち。彼らは、温暖化によって危機にさらされた地球の歴史を、まるで思い出を振り返るかのように見届けているのでしょう。そしてその様子を、ただ傍観している人間の視点が重なります。二重の視点を用いて危機感を伝える構成は極めて独創的であり、強いメッセージ性が高く評価されました。地球と生き物への切実な想いが確かに伝わってくる作品です。

佐賀県教育委員会賞の『記憶の溝』は、ビジュアルの力強さと繊細さが見事に同居していました。人が記憶を通して人間らしさを育んでいく様を象徴的に描き出し、それを中学生が創り上げたことに大きな驚きを覚えました。表現の完成度と発想の深さが際立つ作品です。

第 75 回記念特別賞の『希望』は、人の歩んできた道が未来へと続く姿を力強く示していました。道の両側に重ねられた多層的なイメージには、経験を糧にしながら明るい世界へと進んでいきたいという願いが込められています。過去と未来を結ぶ視覚的表現が、記念の年にふさわしい力強いメッセージを放っていました。

自分が「これを伝えたい」と思えるテーマに出会い、作品として表現することは何より素晴らしい体験です。デザインにおいて最も評価されるべきは、選んだテーマをどの視点から捉え、そのメッセージを視覚表現やコピーでどれほど力強く伝えられるかという点にあります。そして見る人にドキドキやワクワクを与え、ときには不安や緊張をも呼び起こすような気づきをもたらすことこそ、デザインの大きな力だと改めて感じさせられました。

（森野晶人）